

ペルー日食記

—「カミカゼ」日食ツアー、砂漠を疾走する—

新堂 泰伸

私は3、4年毎に発病する、節度のある日食病患者である。前回、1991年のメキシコ以来3年経ったのでそろそろと考えていたところ、さる人が行くと聞いて同じ阪急交通社のツアーに申し込んだ。これまで3回の日食は全て理科大OB会のツアーだったので出発まで何回もミーティングを重ね、十分に気分を高めて本番に望んでいたが、それに比べるとこのような旅行社主催のツアーというのはあっさりしたもので、出発前の顔合わせもなく、参加者名簿も配られないので当日まで誰が参加しているかもわからない。観測地探しの手間もなく、前日のリハーサルもないので何か気持ちの準備が不十分のまま日食を迎えてしまった。日食も見られるペルーハイライト旅行という感じである。

阪急交通社のツアーはA、B、C3コース各50名づつ、計150名が集まった。私はBコースで10月31日に成田を発ち、シアトル、マイアミ経由でリマに到着し、1泊した後、観測地近くのアレキパに入った。アレキパの空港は間近に6000メートル級のチャチャニ、ミスティの両火山がそびえ、気持ちの良い場所である。ついにアンデスに来たという感慨を覚えた。地元のテレビ局が来ていて、その夜のニュースに登場した人もいたようだ。アメリカの天文学者がインタビューを受けていた。

11月3日当日、午前2時にホテルを出発し、バス3台で観測地のラ・ホーヤ平原に向かった(ここで3つのコースが合流した)。バスの中でようやく観測地の様子や、観測方法の説明が行われた。Bコースにはインストラクターとしてスカイウォッチャーの川口編集長が参加しており、そのほか白尾元理さん、小池田さんご夫妻も参加していた。45分ほど暗闇の中を走って、休憩かなと思ったところが観測地であった。

昨日の夕方曇っていたが、この時はかなり星がみられた。大マゼラン雲、カノープス、偽十字など懐かしい南天の空である。南十字の一部も見ることができた。低空に雲があったが、「この雲は夜明けとともに消えます。」というインストラクターのアナウンスもあり、期待が膨らんできた。私たちのサブグループ(入山さん、山本さん、浅川さん、沢近さん2人、新堂夫妻)のうち、曲がりなりにも赤道儀を持ってきたのは私だけで、準備は簡単に終わった。サービスのコーヒーを飲んで夜明けを待った。

明るくなってみるとずいぶん雲が多い。ここはアレキパからモレンドへ通じる鉄道が道路と交わる地点で小さな集落となっている。小学校のバスケットコート(下はコンクリート)とそれに続くサッカー場が観測地にあてられていて、私たちはサッカー場の中に陣取っていた。小学校のまわりには幾らか樹木があるが周辺はただただ広大な平原であり、はるかにチャチャニ、ミスティ等の山々が望まれた。海からはおよそ50kmの距離だが海は見えなかった。標高

は1400mほどであった。

別のコースには大野裕明氏らがインストラクターとして参加しており、観測地はさながら最近夏場によくある「星祭」の雰囲気であった。かなりの人数の警官が警備にあたっていて、地元の人もだいぶ出てきていた。他の観測チームは見あたらなかった。

日の出となったが、太陽はすぐに雲の中に隠れた。東の方ちょうど皆既のおこるあたりに大きな雲があり、殆ど移動していない。高層雲が空全体を覆いつつあり、「これは、ハワイの時より悪いね」などという声も聞こえてきた。今回はハワイ残念組も多数参加していたのだった。第1接触を過ぎたが状況は好転しない。時々雲が薄くなったところから途中経過が判る程度である。インストラクターも先ほどの予測はどこえやらで、「このような場合、本影錐の移動を観測するのもひとつの方策です。」などとアナウンスしている。第2接触30分程前になって事態は急転した。「ここからXXkm離れた地点が晴れている情報が入りました、今からバスを出しますから希望者は双眼鏡だけ持ってバスに急いで下さい、望遠鏡はだめです。」というアナウンスがあり、大多数の人がバスに殺到した。3台のバスは砂漠の中の道路を超高速で疾走し、一同は劇的なコロナとの対面を果たしたのであるが、私は20数人の居残り組の一人だった。第2、第3接触は雲をすかして見られた。第2接触の最後に3つのビーズが並んでいたのが印象に残っている。皆既帯の幅が狭いのと、雲のせいかな皆既中はたいへん明るかった。

聞けば阪急交通社のツアーは91年のメキシコでも日食当日、第2接触の1時間ほど前に観測地のサンホセ・デル・カボに入り、その日の内にロスアンジェルスに戻ったそうで、今回の直前大移動でスリリングな日食観測が売りものになってしまいそうだ。もうすこし日食前後の日程は余裕を持たせるべきであろう。